

千葉寺地区の遺跡展

地中の歴史をさぐる



鷺谷津遺跡の
国府型ナイフ形石器



中野台遺跡の弥生時代中期土器
(千葉経済大学地域経済博物館所蔵)



観音塚遺跡の
線刻管玉「九庄世」



観音塚遺跡の墨書土器「子驛家カ」



観音塚遺跡の
和同開珎



観音塚遺跡の
金鈴

展示開催館

千葉県立房総のむら 風土記の丘資料館

印旛郡栄町龍角寺1028 ☎0476-95-3333

7月14日(土)～9月24日(月・祝)

展示解説会 7月28日(土)・8月12日(日)・9月8日(土)

千葉市立郷土博物館

千葉市中央区亥鼻1-6-1 ☎043-222-8231

10月20日(土)～12月16日(日)

展示解説会 10月28日(日)・11月17日(土)・12月1日(土)

千葉県立中央博物館

千葉市中央区青葉町955-2 ☎043-265-3111

平成31年1月12日(土)～2月3日(日)

展示解説会 平成31年1月14日(月・祝)・1月27日(日)

解説：財団職員

解説時間：各開催館とも上記解説日の午前10:30～、午後14:00～

開催館により展示内容が異なることがあります。
千葉市立郷土博物館では、奈良・平安時代のみのミニ展示となります。
休館日・入館料は各開催館にお問い合わせ下さい。

講演会

日時 平成31年1月20日(日)

午前10時30分～午後3時30分

会場 千葉県立中央博物館講堂

講師 白井久美子(千葉県立房総のむら)
田中 広明((公財)埼玉埋蔵文化財調査事業団)
栗田 則久((公財)千葉県教育振興財団)

※詳細は千葉県教育振興財団までお問い合わせください。

当日先着
150名

【主催】(公財)千葉県教育振興財団

【共催】千葉県立中央博物館・千葉市立郷土博物館

【後援】千葉県教育委員会・千葉市教育委員会・千葉県博物館協会

【問い合わせ】

(公財)千葉県教育振興財団文化財センター

☎043-424-4850 http://www.echiba.org/bunkazai_top.html

ごあいさつ

千葉県では、年間400件ほどの発掘調査が行われ、房総各地の歴史と文化を伝える貴重な成果が数多く得られております。当財団の調査成果については、展示会や遺跡見学会をはじめ、ホームページや広報紙『房総の文化財』などの刊行物で、順次紹介してまいりました。

今回企画した展示会は、千葉寺地区の土地区画整理事業に伴って調査された4遺跡のほか、隣接する県立青葉の森公園建設に伴う荒久遺跡の調査成果を加えて、「千葉寺地区の遺跡展～地中の歴史をさぐる～」と題して紹介するものです。東京湾東岸に位置し、古代の東海道が付近を通るなど、交通の要衝地として栄えた千葉寺町一帯に広がる旧石器時代～近世にかけての多様な文化を展示を通して感じていただき、埋蔵文化財の重要性とその保護の大切さを御理解いただければ幸いです。

最後になりましたが、御協力をいただきました関係機関並びに関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

公益財団法人 千葉県教育振興財団

- | | |
|----|--|
| 凡例 | 1 本図録は、平成30年度出土遺物公開事業「千葉寺地区の遺跡展」の展示解説図録です。 |
| | 2 展示資料は、鷺谷津遺跡の弥生時代中期の壺1点が千葉経済大学地域経済博物館所蔵で、ほかはすべて千葉県教育委員会所蔵です。 |
| | 3 本展示は、文化財センター長 島立桂・整理課長 田島 新の指導のもと、上席文化財主事 橋本勝雄・栗田則久が担当し、図録の執筆・編集は栗田が行いました。 |

千葉寺地区の遺跡の概要

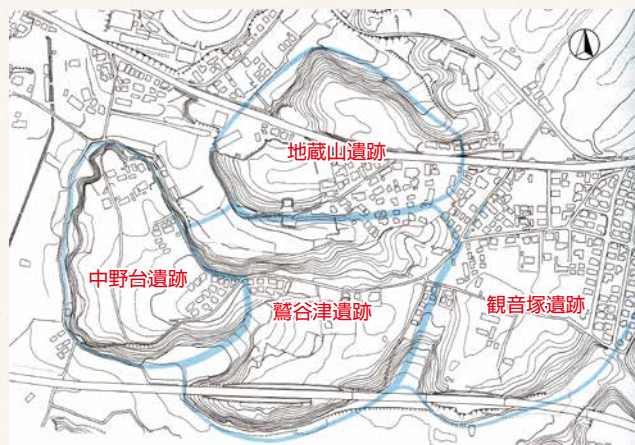
千葉寺地区は、千葉市中央区千葉寺町に所在し、県立青葉の森公園の整備及び県営千葉寺球場・陸上競技場の青葉の森公園への移転などに関連して、千葉寺町一帯に土地区画整理事業が計画されました。

発掘調査は、じぞうやま地蔵山遺跡・わしやつ鷺谷津遺跡・かんのんづか観音塚遺跡・なかのだい中野台遺跡・あらく荒久遺跡の5遺跡を対象に、昭和60年度～平成11年度にかけて断続的に行われ、その成果については、平成4年3月に「千葉市地蔵山遺跡(1)－住宅・都市整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」の報告書を皮切りに、平成18年3月に「千葉市中野台遺跡・荒久遺跡(4)－独立行政法人都市再生機構千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ」を刊行してすべての遺跡の報告が終了しました。

主な成果として、旧石器時代のⅣ層下部・Ⅴ層の石器群、弥生時代中期の方形周溝墓などがありますが、特に、飛鳥時代～平安時代にかけての大規模な集落が注目されます。古代東海道の駅との関連や、一般集落ではほとんど見られない金鈴や和同開珎の出土などから、この時期の集落が地域の有力な中心集落と考えられます。



千葉寺地区主要遺跡航空写真



千葉寺地区主要遺跡位置図

旧石器時代

千葉寺地区のすべての遺跡及び関連する青葉の森公園の荒久遺跡から旧石器時代の石器が見つかっています。しかも、Ⅸ層(約3万年前)～Ⅲ層(約1万2千年前)にいたるまで間断なく石器が出土しており、比較的長期間にわたって人々の営みがこの地域であったことが分かっています。今回の展示では、その中の特徴的な時期の石器群を紹介します。

関東ローム層とは

旧石器時代の石器が見つかる地層は、関東ローム層と呼ばれる赤土で、その大部分は当時盛んであった火山活動によって運ばれた火山灰が堆積したものです。関東ローム層は、古い順に、多摩ローム層・下末吉ローム層・武蔵野ローム層・立川ローム層という序列になっています。県内で石器が発見されるのは、最も新しい約3万5千年前～1万2千年前の立川ローム層の中からです。

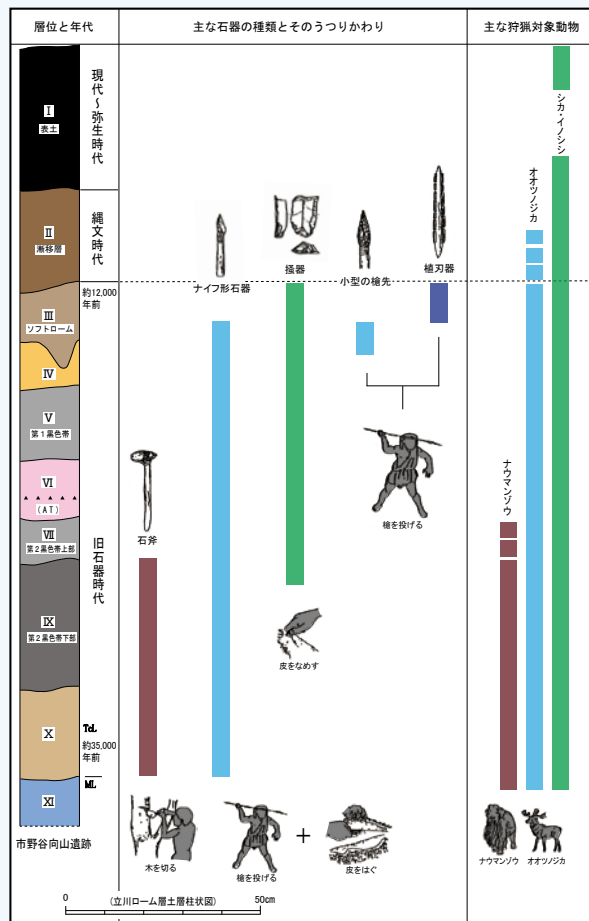
立川ローム層を詳しく観察すると、8枚(X層～Ⅲ層)の土層に分けることができます。それぞれの土層は年代がほぼ想定されていますので、出土した土層から石器の年代と移り変わりを知ることができます。

千葉寺地区の旧石器

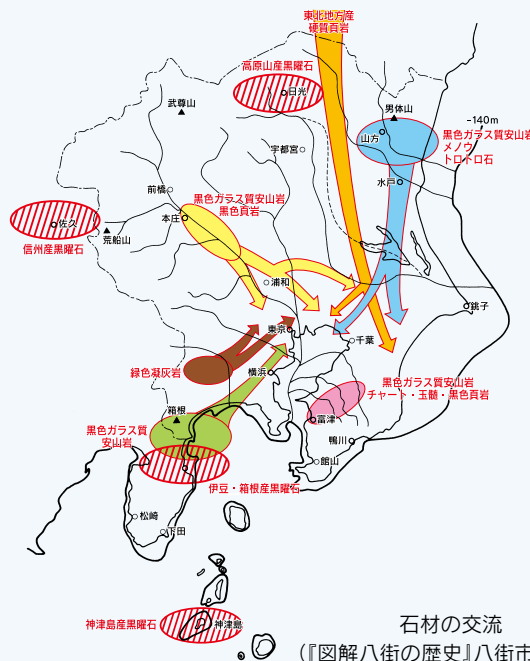
旧石器時代の遺物量は2,337点を数えます。その内容は、ほぼ下総台地の典型例で、器種としては、ナイフ形石器・削器・角錐状石器・小型尖頭器・細石刃・石錐などがあります。ナイフ形石器を基調として、これにほかの器種が加わるというのが旧石器時代における石器組成の基本形といえます。



石器に用いられた石材は、関東地方一円のチャート・流紋岩・黒色頁岩・メノウ・トトロ石・ガラス質黒色安山岩・緑色凝灰岩・黒曜石(高原山産・神津島産・箱根畑宿産)を主として、東北頁岩(硬質頁岩)・黒曜石(信州系・伊豆柏峠産)が加わります。このことは、他地域との交流のようすを知る上で重要な成果となっています。



石器の移り変わり
(『ふるさと流山のあゆみ』流山市立博物館2015)



旧石器時代

注目される石器

千葉寺地区の多くの資料の中では、立川ロームⅣ層下部・Ⅴ層段階の鷲谷津遺跡から出土した国府型ナイフ形石器と、鷲谷津・中野台遺跡の搔器の一群及び荒久遺跡のⅢ層出土の細石刃が注目されます。

1. 国府型ナイフ形石器

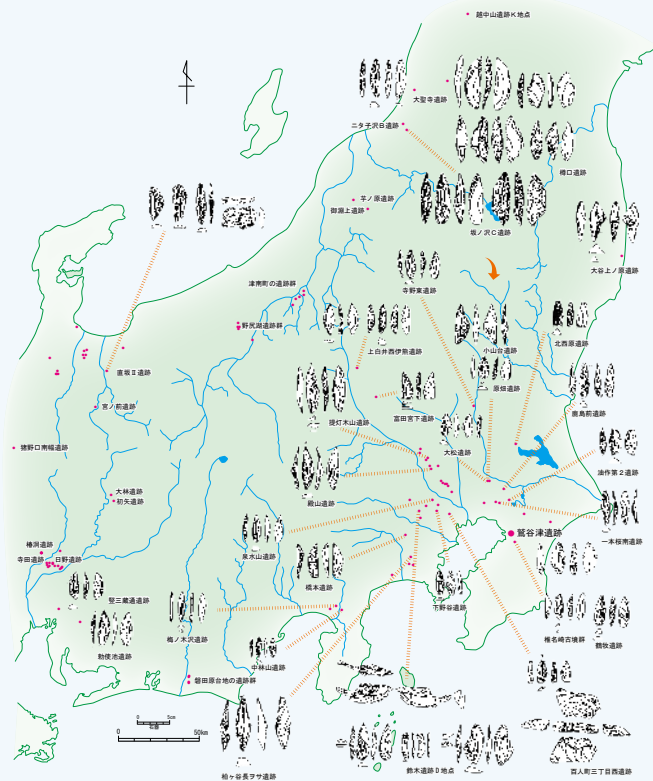
国府型ナイフ形石器とは、瀬戸内技法によって製作された翼状剥片を素材としたナイフ形石器のことです。この石器は、近畿以西の瀬戸内地方に起源があります。その影響下で成立した国府系石器群の確実な資料は、日本海側では山形県、太平洋岸では関東地方が東限といえましょう。

関東では、千葉県を中心として主に南関東に分布しています。国府型ナイフ形石器は基本的に搬入品で、東北頁岩製と乳白色のメノウ製の2種があります。東北頁岩製には、千葉県鷲谷津遺跡をはじめとして、柏市大松遺跡・原畑遺跡・小山台遺跡、我孫子市鹿島前遺跡、印西市油作第2遺跡など、メノウ製には、埼玉県上尾市殿山遺跡があります。メノウの産地は、新潟県北部方面に求められ、この付近では、東北頁岩とのセット関係がみられます。

このことから、これらの資料の多くは新潟県北部から製品としてもたらされたものと考えられます。



国府型ナイフ形石器
(鷲谷津遺跡)



国府型ナイフ形石器の関連遺跡分布図
(当財団橋本氏作成)

2. 搔器

搔器とは、剥片の一端に打撃による加工を施し、弧状の刃部を作り出したものです。その機能は、使用痕分析や民族例などから、「皮なめし」であり、関連遺跡の分布が東北日本に偏ることから、寒冷地の石器とされています。



搔器(皮をなめす石器)
(『図解八街の歴史』八街市2012)

旧石器時代には比較的多く出土し、多様な形態のものが製作されましたが、特に、鷲谷津遺跡や中野台遺跡のような立川ローム層Ⅳ層下部・Ⅴ層段階の出土数が突出しており、搔器の大量製作と再加工が特徴的です。石材は、栃木県高原山産黒曜石をはじめとした関東地方の石材が主体で、遠隔地のものはきわめて少ないのも特徴です。

3. 細石刃

細石刃とは、小さな長方形の石のかけらで、細石刃核から生産されます。細石刃は、動物の骨や角で作られた軸の側縁に彫られた溝に、マツヤニや天然アスファルト等の接着剤で固定されました。この道具は「植刃器」と呼ばれ、投げ槍やナイフとして使用されました。摩耗した細石刃は、カミソリの替え刃のようにその都度交換されたようです。



細石刃(荒久遺跡)



植刃器試作品
(当財団橋本氏作成)

縄文時代

千葉寺地区では、縄文時代草創期～後期に至る遺構や遺物が発見されており、比較的長期間にわたる縄文人の足跡をたどることができますが、遺構はすべて縄文時代早期に属するものであることから、縄文人のこの地での営みはほぼこの時期に限られると思われます。しかも、竪穴住居跡が見つからなかったことから、定住的な集落ではなく、一過性のキャンプのような地として利用されたようです。

炉穴

炉穴は、荒久遺跡を除く4遺跡から84基検出されました。その中では、地蔵山遺跡で38基、中野台遺跡21基、鷲谷津遺跡17基と、千葉寺地区遺跡群に北西から入り込む小支谷を囲むように所在しています。



SK022 炉穴(鷲谷津遺跡)



炉穴の使用法(想像図)
(『縄文-ふなばし-再発見』船橋市
飛ノ台史跡公園博物館2000)

炉穴とは、縄文時代早期後半

に一般的にみられる遺構で、楕円形の穴の一端に燃焼部、反対側に人が作業する足場が設けられるのが基本形ですが、同じ足場から燃焼部が別に掘り込まれ、たこ足状になることもあります。

炉穴の使用方法については、一次的な住居施設や土器焼成場などの諸説がありますが、半地下式の煮沸用の調理施設とする考えが有力となっています。

千葉寺地区の炉穴からは、^{じょうこんもん}条痕文系の土器である^{うがしま}鵜ガ島台式土器や^{かやま}茅山下層式土器が出土していますが、後者がほとんどであることから、きわめて短期間に多くの炉穴が使用されたことが考えられます。



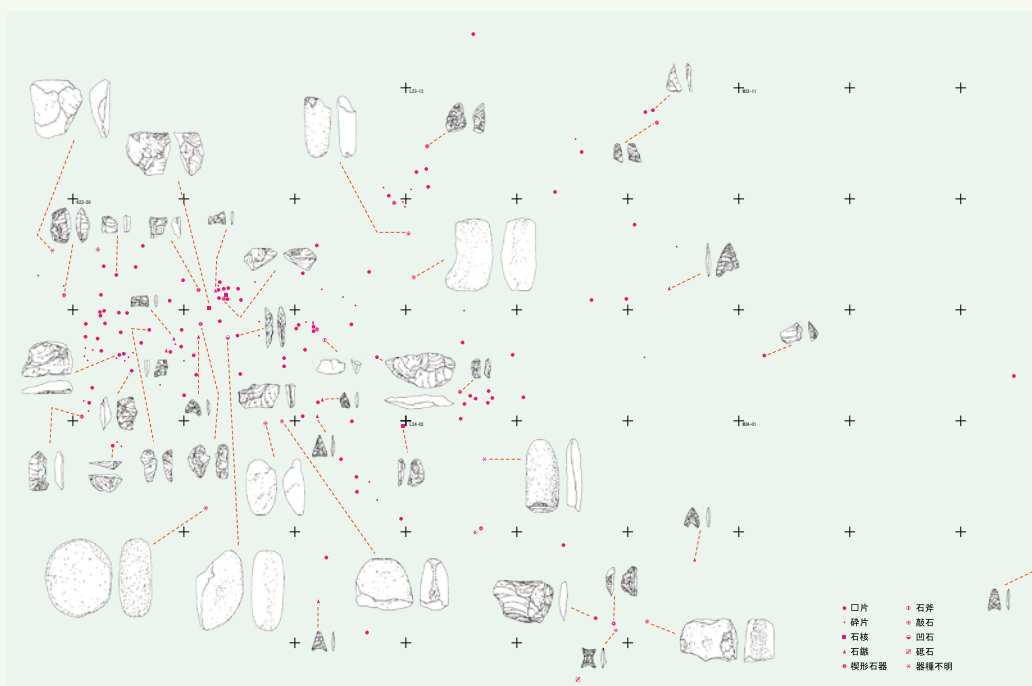
SK036D 炉穴出土鵜ガ島台式土器
(地蔵山遺跡)



SK683 炉穴出土茅山下層式土器
(中野台遺跡)

石器製作跡

地蔵山遺跡では、東西約70m、南北約50mの範囲から石器製作に関わる遺物が多数出土して注目されています。石器の器種としては、石鏃・^{くまひ}楔形石器・石斧・敲石・砥石及び剥片類がありますが、石鏃の素材剥片や未成品が数多くみられることから、この場所で石鏃の製作が行われていたものと想定されます。



石器製作跡石器分布図(地蔵山遺跡)

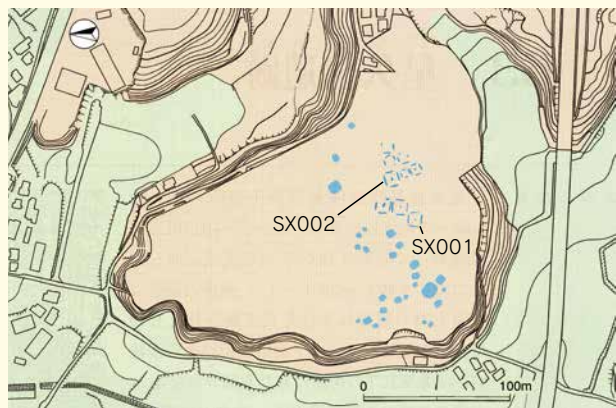
弥生時代

弥生時代の遺構は、鷲谷津遺跡や地蔵山遺跡で少数の竪穴住居跡が確認されていますが、主体は中野台遺跡で、竪穴住居跡24軒と方形周溝墓9基が検出されました。ここでは、中野台遺跡について紹介します。

方形周溝墓

列島内の方形周溝墓は、弥生時代前期に近畿地方を中心に分布していますが、前期末の愛知県の遺跡では、周溝の四隅が開口する形態が主体となっています。このタイプが房総を含めた南関東の弥生時代中期の方形周溝墓に一般的なもので、分布の起点が濃尾平野にあることを示しています。

中野台遺跡の方形周溝墓は、台地の南側中央部に9基集中して築かれています。周溝の向きからみると、西側の3基と東側の6基の2つのグループに分けられそうです。西側の3基はほぼ同じ規模であるのに対し、東側は西側とほぼ同じやや大型の1基と中小規模の5基で構成されています。すべて四隅が開口しているタイプで、5基で中央部に埋葬施設が確認されました。ただ、いずれも施設の底部を残すのみであり、上部がかなり削平されていたと思われ、中小規模の方形周溝墓にも本来埋葬施設があったものと思われそうです。



弥生時代遺構分布図(中野台遺跡)
(『千葉県の歴史 資料編 考古2』千葉県 2003)

土器は、西側の2基と東側の1基の周溝内から出土しました。いずれも弥生時代中期中葉～後葉にかけての「宮ノ台式」段階に位置づけられることから、土器の出土していない他の方形周溝墓もほぼ同時期と思われる、短期間に集中的に築かれたようです。なお、昭和31年に千葉経済高校の発掘によって出土した壺は、SX001方形周溝墓に伴うものと考えられています。



SX001 方形周溝墓



東側溝土器出土状況

この時期の集落は、地蔵山遺跡と鷲谷津遺跡で見られますが、竪穴住居の軒数が3軒～4軒と少なく、この方形周溝墓群を営んだ集落とは考えられません。中野台遺跡の北側が中世の遺構によって大規模に削平されており、この場所に集落が存在していた可能性が高いと思われそうです。



昭和31年調査時出土土器
(千葉経済大学地域経済博物館蔵)



SX002 方形周溝墓出土土器

後期の集落

中野台遺跡の弥生時代の竪穴住居跡はすべて後期に属しています。この遺跡の特徴は、南関東系の土器を出土する楕円形を基本とした竪穴住居跡と、北関東系の土器をもつ隅丸長方形や方形の平面プランの竪穴住居跡に分けられます。南関東系のグループに、長軸10mを超え、壁柱穴を巡らした大型の竪穴住居跡が存在しており、この遺跡の中では、南関東系が主体で、北関東系が客体的であることがうかがえます。



SI047 竪穴住居跡(南関東系)



SI049 竪穴住居跡(北関東系)



SI050 竪穴住居跡出土土器



SI049 竪穴住居跡出土土器

古墳時代

千葉寺地区の古墳時代を概観すると、弥生時代の集落を継承するように、中野台遺跡のみに前期の集落が営まれています。中期になると、観音塚遺跡以外の3遺跡に小規模な集落が形成されますが、閑散とした集落景観を呈しています。この状況は、古墳時代後期前半まで継承されますが、後期後半になると集落規模が飛躍的に大きくなります。後述する飛鳥時代は、本来は古墳時代後期後半あるいは終末期として古墳時代の範疇に入るべき段階ですが、奈良・平安時代との関係が強いため、ここでは触れないことにします。

前期

中野台遺跡で、弥生時代後期から継続して古墳時代前期の集落が形成されています。この時期の竪穴住居跡は37軒あり、そのうち28軒は古墳時代の出現期にさかのぼるものと思われます。竪穴住居跡の分布は、弥生時代後期とほぼ同一で、この点からも弥生時代との継続性をうかがうことができます。



SI065 竪穴住居跡(中野台遺跡)



SI065 竪穴住居跡出土高杯

中期

中野台遺跡では、古墳時代中期の集落が極端に減少し、後期前半には終息を迎えます。他の遺跡では、小規模ながらも地藏山遺跡で中期後半の集落が出現します。この遺跡で注目されるのは、5世紀後半段階の竪穴住居跡にカマドを設けるタイプと従来の炉を使用しているタイプの両者が混在している点にあります。



SI032 竪穴住居跡(地藏山遺跡)



SI011 竪穴住居跡(地藏山遺跡)

房総におけるカマドは、市原市を中心とした東京湾東岸地域で出現することが分かっていますが、千葉寺地区でも中期の5世紀後半には、従来の炉に加えてカマドが採用されたようです。



SI032 竪穴住居跡出土須恵器蓋



SI011 竪穴住居跡出土土師器椀

後期

古墳時代後期は、先述したように、後期後半については、奈良・平安時代に含めて記述することとしているため、ここでは後期前半(5世紀末～7世紀前半)について紹介します。

この時期の集落は、観音塚遺跡を除く各遺跡で見つっていますが、中期の規模を継承するかのようにな数軒単位で営まれており、閑散とした集落景観がうかがわれます。この時期の竪穴住居跡にはすべてカマドが設置されています。



SI007A 竪穴住居跡(中野台遺跡)



SI014 竪穴住居跡(鷲谷津遺跡)



SI007A 竪穴住居跡出土土師器杯



SI014 竪穴住居跡出土土師器杯

飛鳥・奈良・平安時代

千葉寺地区でのこの時期の集落は、荒久遺跡以外の4遺跡で認められますが、地藏山遺跡では5軒、中野台遺跡では10軒ほどと小規模な集落となっています。一方、中野台遺跡の東側に位置する鷲谷津遺跡では、7世紀後半～10世紀前半代頃までの竪穴住居跡72軒、最も東に位置する観音塚遺跡では、7世紀後半～10世紀中頃までの竪穴住居跡が100軒ほど見つかっています。遺構の密度や遺物の内容などから、この2遺跡が千葉寺地区の拠点的な集落であることが考えられます。特に、観音塚遺跡は、古墳時代後期前半までほぼ無住の地となっていたが、7世紀後半の飛鳥時代になって突如として大規模な集落が出現するという特徴があり、当該時期の集落の出現背景やその性格を考える上で重要な位置を占めています。ここでは、その観音塚遺跡の集落を中心に時代順に紹介します。

飛鳥時代(7世紀後半頃～8世紀初頭)

観音塚遺跡では、57軒の竪穴住居跡が確認され、調査区全域に広がっています。このことは、それまで無住の荒地であった台地上を広範囲に開発して居住域を確保したことを示しています。この時期、約半数の竪穴住居跡から東海産と思われる須恵器が多く出土しています。半球系の杯蓋やこれに組み合わさる蓋受けをもつ杯、底部がやや突出する高台付き杯などこの時期特有の須恵器が多くみられます。

一方、鷲谷津遺跡では、上記の須恵器の他に、千葉寺地区の遺跡群では唯一の鉄製馬具(轡)や銅製の帯金具、畿内産土師器など一般集落では希少な遺物を保有しています。

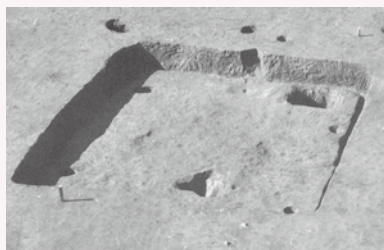
この頃に建設された東海道の房総が含まれ、東京湾東岸に沿って上総国府から「河曲駅」を経由して下総国府を結ぶ道路と、香取・鹿島神宮に向かう道路が設けられました。後者の道路が本道で、「古東海道」と呼ばれています。この道路を利用した畿内からの有力氏族や役人の移動に伴って、先進的な物資が房総にもたらされるようになりました。千葉寺地区で出土した畿内産土師器や東海産の須恵器、帯金具をはじめとする貴重な金属製品などは、この道路の存在が大きく関わっています。千葉寺地区は、「河曲駅」(所在地は不明)付近に位置すると想定されることから、物流の拠点として機能していたようです。



飛鳥時代竪穴住居跡分布図(観音塚遺跡)



8世紀初め～771年の古東海道



SI002 竪穴住居跡(観音塚遺跡)



SI086 竪穴住居跡(鷲谷津遺跡)



SI002 竪穴住居跡
出土須恵器蓋



SI086 竪穴住居跡
出土馬具(轡)

飛鳥・奈良・平安時代

奈良時代

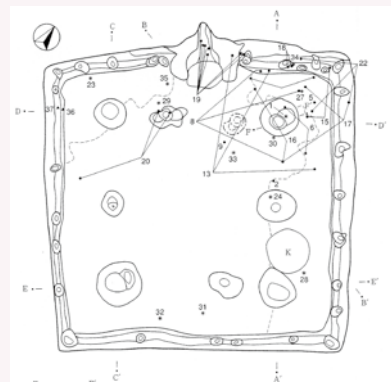
この時代が、観音塚遺跡で最も集落が大きくなり、飛鳥時代の約2倍の103軒の竪穴住居跡が営まれていました。鷲谷津遺跡も同様に拡大しますが、その軒数からみると、この時期の中心集落は観音塚遺跡と考えられます。2つの遺跡に共通する遺物には、和同開珎・銅製帯金具・畿内産土師器など、一般集落ではあまり見られない特殊なものがあります。ここでは、出土した特殊な遺物をもとに遺跡の性格を考えてみます。

【和同開珎】

観音塚遺跡と鷲谷津遺跡で各1枚出土しています。いずれもやや大型の竪穴住居跡で、支柱穴を6本もっています。両遺跡の奈良時代の竪穴住居跡で、6本の支柱穴をもつ例は他になく、この2軒の住居は特別な建物といえます。特に、観音塚遺跡の竪穴住居跡には壁支柱穴が巡っており、壁持ちの住居と想定され、観音塚遺跡の集落内での有力者の住まいと考えられます。



SI006 竪穴住居跡(部分)



SI006 竪穴住居跡平面図

この状況からは、和同開珎は単なる貨幣としてではなく、地位や富の象徴として保有されていたようです。

【帯金具】

観音塚遺跡で11点、鷲谷津遺跡で4点の銅製及び金銅製の帯金具が出土しています。金銅製の帯金具は、観音塚遺跡の飛鳥時代の3軒の竪穴住居跡から各1点、計3点みられます。いずれも帯先金具と呼ばれるものです。また、帯金具の「巡方」は奈良時代に属し、ほとんどが観音塚遺跡から見つかっています。これらの帯金具は、本来役人の腰帯に複数個取り付けられるものですが、いずれも各住居から1点のみの出土であることから、本来の機能を有しているのではなく、権威の象徴として配布された可能性があります。



SI006 竪穴住居跡
出土和同開珎



帯金具(観音塚遺跡・鷲谷津遺跡)

【墨書土器】

観音塚遺跡からは、墨書土器を主体として線刻も含めて60点の文字資料が出土しています。この中では、「子驛□」と書かれた墨書土器が注目されます。3文字目の□は、ウ冠が確認でき、「家」となる可能性が高く、「子驛家」と想定されます。この文字からは、観音塚遺跡が駅に関連した集落としての性格を有していたと考えられます。

また、「久(状)庄世」の線刻は、古墳時代の管玉に刻まれており、遺物の時期と文字が記された時期が異なります。文字内容については不明ですが、人名の可能性が考えられます。一方、「庄」という文字からは荘園との関係もうかがえます。



墨書土器「子驛家」



線刻管玉
「九(状)庄世」

飛鳥・奈良・平安時代

平安時代

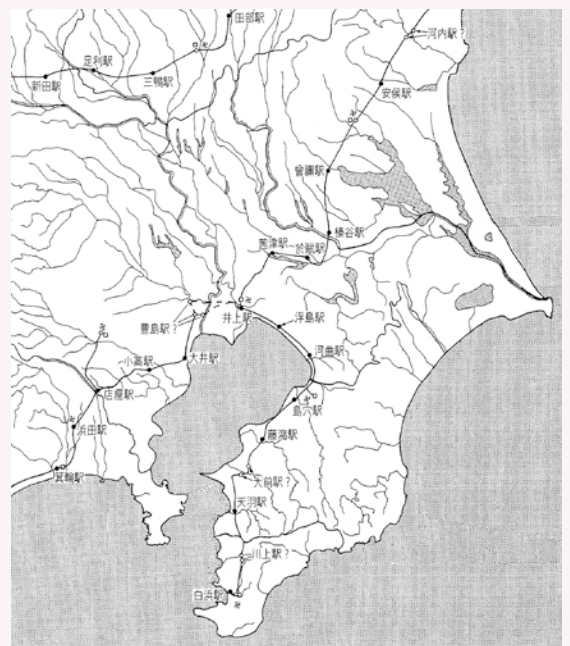
観音塚遺跡では、竪穴住居跡が45軒となり、集落の縮小と終息の時期を迎えます。

その背景には、東海道の変更が関与していると思われます。805（延暦24）年に河曲駅から常陸へ向かう道路が廃止され、下総国府から常陸国府へ向かう道路が本道となり、河曲駅は上総国府へ向かう支路の駅の一つに格下げされました。河曲駅を中心に繁栄した千葉寺地区の集落もこの状況下で衰退の道をたどっていったようです。

一方で、この時期、愛知県猿投産の緑釉陶器や灰釉陶器が観音塚遺跡を中心に出土しています。このような高級陶器がこの地にもたらされたことから考えると、縮小しながらも河曲駅が、物資の交流拠点として機能していたことがうかがえます。また、金銅製の鈴は、県内での出土遺跡をみると、寺院や官衙あるいは官衙関連遺跡などの一般集落とは異なった性格の遺跡がほとんどであり、公的な祭祀行為に使用された可能性が高く、観音塚遺跡の性格の一端を示しています。



平安時代竪穴住居跡分布図(観音塚遺跡)



805年～10・11世紀代の東海道



SI327 竪穴住居跡遺物出土状況



SI327 竪穴住居跡灰釉陶器出土状況



緑釉陶器稜皿



灰釉陶器碗



灰釉陶器段皿



金銅製の鈴

中世・近世

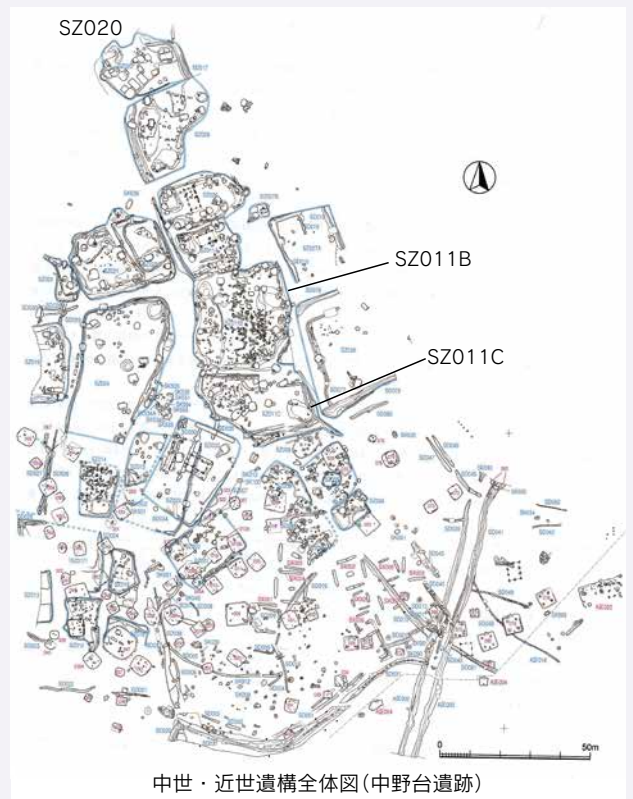
千葉寺地区の遺跡群の中で中世・近世の遺構や遺物が確認された遺跡は、地区の西端部に位置する中野台遺跡のみでした。遺跡の南側部分を除く広い範囲に大小26の区画が展開しています。区画の配置は整然とはなっていませんが、中央部に南北に縦列する区画群を中心として東西に配置されている状況がうかがえます。これらの区画群は、生活感のある遺物を中心で、廃棄された日用品が多くを占めていることから、一定のまとまりをもった屋敷群であったと考えられます。また、区画間の空間は、縦横に走る生活道路と思われる。

この区画群の中で主となる中央部の区画群をみると、北側から中央部にかけてのSZ020からSZ011Cまでは、幅約30mで比較的大きな区画が縦列しています。南側のSZ009～SZ006の区画は小規模ですが、これらをまとめるとほぼ30mの幅となり、一定の規制の中で配置されたものと思われる。一方で、西側部分はばらつきが認められ、不規則な配置となっています。

この区画群の中で、同時に複数の掘立柱建物群が存在しているのは中央部のSZ011Bで、この区画が特に大規模な屋敷地と考えられます。区画周縁部には屋敷内の貯蔵施設と思われる土坑や地下式坑が配置され、一角にまとまって見つかった土坑群は屋敷地内の墓地として利用されたようです。

遺物の分布は、陶磁器類は14世紀代～15世紀前半代の製品が全体に散在し、15世紀後半代以降の製品はSZ011Aより北側に、近世の遺物は北端のSZ020・SZ029に集中しています。また、SZ011Bでは、2基の地下式坑から茶臼が出土しており、屋敷内に茶を嗜む人々が居住していた状況がうかがえます。

少量ながら出土した瀬戸・美濃製品の年代からは、15世紀後半～17世紀以降に機能していた遺跡と考えられますが、貿易陶磁器の少なさからは、屋敷の居住者階層は領主層ではなく、一般集落に近いものと思われる。



中世・近世遺構全体図(中野台遺跡)



SZ011B区画全景



SZ011B区画内地下式坑



中世・近世陶磁器



中世・近世瀬戸・美濃製品



中世・近世播鉢

展示関係略年表

	世紀	時代	主なできごと	千葉寺地区の各遺跡とできごと	
35,000年前		旧石器時代	氷期が続く 狩猟や採集をしながら移動生活	人々が住み始める 荒久遺跡 旧石器時代の最盛期 鷺谷津遺跡 細石刃の使用 荒久遺跡	
13,000年前					
10,000年前			草創期 早期	土器をつくり始める 狩猟や採集の生活が続く	炉穴の使用 地蔵山遺跡・中野台遺跡
7,000年前		縄文時代	前期	本格的なムラがつくられ始める	
6,000年前			中期	大きな貝塚・ムラができる	
5,000年前			後期		
4,000年前			晩期		
2,500年前		弥生時代	前期	稲作が始まる	
2,300年前			中期	環濠集落の出現、房総でも稲作開始	方形周溝墓の出現 中野台遺跡
2,000年前	1世紀		後期	各地に小さな国が誕生、身分の格差	
1,900年前	2世紀				集落の形成 中野台遺跡
1,800年前	3世紀				
1,700年前	4世紀	古墳時代	前期	ヤマト王権の確立 奈良に出現期の古墳がつくられる	小規模な集落の形成 中野台遺跡
1,600年前	5世紀		中期	倭の五王の時代 各地に巨大な前方後円墳がつくられる	地蔵山遺跡
1,500年前	6世紀		後期	群集墳の盛行	中野台遺跡・鷺谷津遺跡
1,400年前	7世紀	(飛鳥時代)	646大化の改新	新たな開発と大規模な集落の出現 鷺谷津遺跡	
1,300年前	8世紀	奈良時代	710平城遷都	集落の盛行 観音塚遺跡・鷺谷津遺跡	
1,200年前	9世紀	平安時代	794平安遷都		
1,100年前	10世紀		940将門の乱平定	集落の縮小 観音塚遺跡 集落の衰退 観音塚遺跡	
(鎌倉時代省略)					
	15世紀	南北朝時代	1467応仁の乱	一般集落の形成 中野台遺跡	
		室町時代			
500年前	16世紀	戦国時代	1590豊臣秀吉全国統一		
400年前	17世紀	江戸時代	1603徳川家康征夷大將軍となる		

●発行日：平成30年7月13日

●編集・発行：公益財団法人千葉県教育振興財団 〒284-0003 四街道市鹿渡809-2

●印刷：株式会社エリート情報社